



## 庄川良平さん（寺井町在住・67歳）

「物腰の柔らかいおじいちゃん」。第一印象から変わらない印象。横浜、東京を拠点に九谷焼の間屋の家業を継ぎ、その後、故郷石川に帰り、最近では祖父などの九谷焼を売り歩いた軌跡の資料などを整理しているという。庄川良平さんに、その半生を伺った。

### 庄川良平六十七歳、半生を語る 横浜で九谷焼を売り、故郷石川能 美市へ

現在は、店をたたんでしまったが、庄川良平さんのもともとの家業は、九谷焼の窯元。祖父が戦前から外国へ輸出していたものを、「戦死した」と報告されていた父が帰国して昭和20年に継いだ。井出県議の父と「九谷会社」を創業し、昭和二十二年には、昭和天皇の行幸旅行視察が訪れた。しかし、商売の経験がなくロマンチストの庄川さんの父（良一）と、現

実的な井出氏のそりが合わず、決裂。昭和二十八年に、祖父の兄を頼って横浜伊勢佐木町に九谷焼窯元（問屋）を開業する。庄川良平さんは、寺井の田舎から、進駐軍の外国人がたくさんいる横浜に出て、その強烈なインパクトにより、昭和二十八年（七歳）以前の記憶が全然ないという。

#### 小学生時代

#### 差別をしない土台を作った横浜伊勢崎町

寺井（能美市）の小学校1年生の1学期が終

わった時、横浜へ引越した。当時は進駐軍の外国人、大使館等の人がいっぱい、まさに外国だった。今で言えば、いきなりニューヨークの真ん中に行くようなもの。本当に外国人がいっぱいだった。英語はできなかったけど、簡単なコミュニケーションをとって、遊んでもらっていた。「テレレジー(Take it easy)」とかよく覚えている。

小学生時代は、当時、東映や松竹ほか七社の映画館があったため、映画館に入り浸りだった。また、伊勢佐木から桜木町あたりまでは基本歓楽街で、隣のふぐ屋さんにはテレビがあつたので、よく相撲中継を見た。デパートにもよく潜り込んだし、サーカスが来ると見に行った。当時『パンパン』と呼ばれる、外国人相手にする娯婦や、家の後のリエゾンというバーのママは『オンリー』と呼ばれる外国人の高官相手の日本人妻などもよく見た。リエゾンは、よくジャズを流していたので、寝るときによく聞こえた。その影響でスイングジャズが好き。また、隣の「翁」という和風の居酒屋には、流しのお兄ちゃんがよく来ていたので、それを聞いているのも好きだった。親は、子育てよりも、商売に一生懸命だった。二十二時までの店が終わると、歓楽街抜けて、(途中、赤線の

客引きの女性に冷やかされながら)銭湯に通った。銭湯でも、刺青の人を入れた人ともよくコミュニケーションを取った。

横浜で育って一番良かったのは、外見もバツググラウンドも全て含めて、どんな人も差別しない土台を作ってくれたこと。いろんな職種の人、外国人、商人、お客、危ない人も含めて、多様な人にあつていたことが、その後の商売する上でも非常に役立っていたと思う。

### 中学・高校時代 ファッションと遊びと

中学高校は一貫の、関東学院。当時の先生が、商人の息子だからと、そんなに厳しくないところを薦めてくれた。家からも徒歩で行けるところだった。勉強はできる方で、苦労したことはなかった。横浜という地は、多様な人と物が集まる雑多なところだったので、流行はひととおり地域に通って行った。ツイスト、フラフープ、ダッコちゃん、ホッピンング、ハマったのは、アイビールック。ボタンダウンのシャツに、細いズボン、VANとJUNというブランドが流れた。あとロカビリー。

中学高校で一緒に遊んでいたエディバンという子は、グループサウンズのゴールデンカップスのベースになった。学生時代から音楽がデキる子はスターだった。家にテレビが来たのは昭和三十四年。皇太子のご成婚の番組を見るためだった。

高校のクラスは、ベストクラスという進学クラスで五十人のうち慶応に二五人、早稲田に十六人合格していた。進学は家業を継ぐつもりだったので途中で嫌になったのと、当時親が伊勢木の店を閉めたので相模原に引越した。当時はわからなかったが、資金繰りの関係で、店を閉めたということだった。



昭和28年横浜に引越した当時の写真  
(中央)

そういえば中学の時、広場で野球をして、外野を守っていたら、後ろに石と石の間に袋があり、中を見るとお金が入っていた。そのお金で、仲間3人で伊豆の温泉に一泊旅行に行った。罪悪感がある悪いことをしたなというのは、そのくらい(笑)。そのほかは、ピンク映画を見に行っていたくらい。いまでも女優さんの名前を覚えている。

### 家業を継ぐ 借金返済、拠点を東京に

高校を卒業すると、九谷焼の見本の箱を担いで、進駐軍の外国人のところに営業に行った。英語もろくにできなかったのでキツかった。ただし、やればやっただけ売れるので、やりがいがあった。一日のノルマは十万円、年三千六百万円を設定していた。四年で借金を返し、事務所と家を多摩に建てた。

多摩に行くと、多摩のJ.Cの立ち上げの発起人になってくれと三菱銀行の方から言われ七人のうちの一人になった。ほか六人は土地成金の二世だった。まわりはBMWやベンツに乗る方ばかりだったところに、私はトラックで乗り合わせていた。

### 人のつながりと製造直売の強み

うちの強みは、東剛太郎さんのところで作る生地に、お抱えの絵師が絵付けをする製造直売だった。「デパートに行ってもうちの商品はないですよ」ということをお客さんに言っていた。営業では外国人を相手にすることが多く、お客さんのつながりで、さらにお客さんを紹介することが多かった。帝国ホテルのシェフや、空母ミッドウェイの艦長もいた。空母の艦長室に置く、大きめのランプを買ってくれた。

商品を納めに行くと艦内は迷路のような

構造だった。艦長は艦長の就任パーティにも呼んでくれたが、着ていく服に悩んでいるうちにキャンセルしてしまった。もったいないことをした。その後も「なんで来なかったんだ？」と言われた。

ある方と家族ぐるみで親交があった。相談を持ちかけられた。

「娘が関取と付き合っているんだけど、今度結婚したいと言ってきた。どうしたらいいか」と。「やってみなけりやわからないんじゃないですか」と言った。

誰かと聞くと、曙だという。それがきっかけで、曙の結婚式に参加した。なぜか同席したのが、きんさん・ぎんさん、野村沙知代さん、デーブ・スペクターさん。曙関とは、その後も家族ぐるみで親交がある。

曙は大きい。



曙関との親交は今も続いている

大使館ほかいろんな人と交流ができた。

グアテマラ、ベネズエラ、南アフリカ、欧米、アジア、欧米の人は、目が高い。染付は好まれた。

アジアの人は大きく、派手なものを好む。今も変わらないから、逆にチャンスなんじゃ

ないか。商売としては、額は大きくはないけれど、売りたいものが売れた。ただ、バブルが弾け、円高。商売はじめてのが三六〇円のときでやめたのが一二〇円の時。本当にダメになったから、というわけではないけれど、利幅が本当に小さくなったので、店をたたむ準備を始めた。四十歳の時だった。

### 故郷へ戻る ヨソモノ扱い

娘が中学に入る前に、妻と子供を先に寺井によこし、私は、店をたたむ残務整理をしていた。四十二歳の時に寺井に戻った。

子供は中学の時は、地元の言葉やバックグラウンドがわからず暗く、悪いことしたかな、と思っていたが、高校は校風にあっていたのか、明るくなった。その後も手もかからず、環境的にもこちらに来てよかったと思う。

私達も、寺井に来たはいいけど、地元の風習がわからず、最初はソヨモノ扱いで苦労した。妻は、東京にいた時は九谷焼に興味がなかったのに、寺井に来たら、九谷焼を始め、研修所に通うようになり、今では趣味ともう少し延長の、そこそこのレベルまでになった。風土がそうさせるのかな。

### 転職 受け身の仕事って楽だな

こちらで九谷焼の仕事をしようとも思ったが、業界のいろんなこともあり、やめておいた。

蓄えを食いつぶすだけではいけないから、時給五五〇円のパートで、ビジネスホテルのフロントをした。一年ほどやっていたが、月十万ほどにしかならないので、社長にやめると相談すると、支配人待遇で雇ってくれた。四十五歳の時。それから六十五歳まで働いたので、おか



げさまで厚生年金も少しもらえる。

支配人の仕事は面白かった。九谷焼の商売で多様な人と接していたおかげで、同じような雑多な人が来るホテルは面白かった。社長も頼りにしてくれていた。ホテルに怪しい人が泊まっても、それを楽しんでた。ホテルは、東京、大阪、名古屋のセールスマンが多く、売る商売の苦労はよく知っていたから、夜はその相談に乗っていたりした。それで一定の客がついていたかもしれない(笑)。

ホテルマンになって、受け身の仕事って楽だなと思った。給料は安かったけど。

### エッセイが入選

一九八七年は、「国際居住年」というよくわからない年だったのだけど、「私の住み替え論」というエッセイを募集していたので、東京の店を閉め、石川へ帰る自分を題材にエッセイを書いて応募した。最終一〇作品に残り、アメリカ一周旅行があたった。それで味をしめ、海燕と新人賞募集にも応募した。進駐軍の外国人へ九谷焼を売る商売人と、アメリカ人の日本人妻となった人とのドラマ。最終選考まで

行き、角田光代、松村栄子に負けた。

ほかにもオール読物や現代に応募して入選した。文章が認めてもらえただけでも大満足。今は祖父や父の九谷焼の商社の歴史などをまとめている。

### 歴史をまとめるのと晩酌と

今の楽しみは、家業の歴史や写真をまとめること、今住んでいる地域が高齢者ばかりになっていたので、若い子に来てもらうよう、横町組というまちづくりの会をつくり、とりあえず近所のつながりをもとうとしていること。それから、毎晩一合だけの晩酌。これが楽しみ。

庄川良平さんに話を聞いた。もつと年齢が上だと思っていたら、意外にも六十代だった(庄川さんすみません)。

育った環境から人を差別した目で見なくなつたこと、モノを売る苦勞を知っているからこそ、人の寛容さは大変参考になりました。

庄川さん、九谷焼の職人とは違う、商人の視点からの話をまた、聞かせてください！

平成二十六年五月十八日

石川県能美市 嶋田准也